

40年前に施行した骨癒合の完成したPLF後に発症した 腰椎椎間板ヘルニアに対するMED

Latest techniques and technologies in endoscopic spine surgery



岩井整形外科内科病院 整形外科
高野裕一 志保井柳太郎
馬場聡史 稲波弘彦

Yuichi Takano M.D. <http://www.iwai.com>

症例

55歳 男性 左L5/S1腰椎椎間板ヘルニア

現病歴

- 1年前より腰痛と左下肢痛が出現し、内服治療およびブロック療法などを継続していたが痛みが増強するため当科を紹介され受診した
- 他院での左S1神経根ブロックは有効であったが持続しなかった

現症

- 腰部に20cmの術創瘢痕(+)
- 歩行時に左下肢痛が増強 筋力低下(-) 知覚異常(-)
- SLRは右90° (-)、左30° (+)

既往歴

- 40年前の中学生時に腰椎後方固定術(PLF)
- その後の40年間は下肢痛(-)

術前腰椎機能撮影

- L5/S1の不安定性やすべりは認めなかった



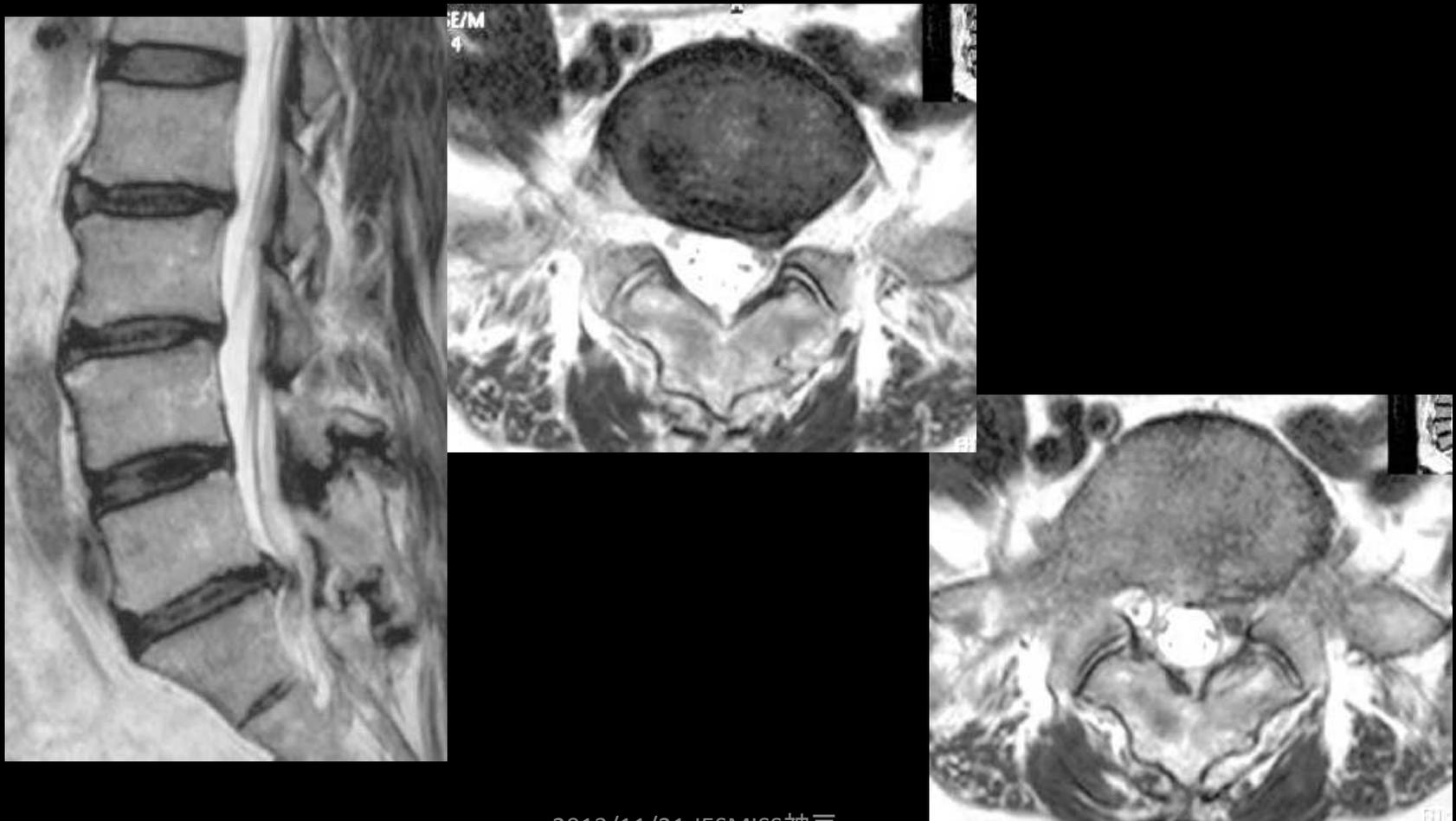
術前腰椎CT画像

- L5/S1に椎間は認めず骨癒合していた



術前腰椎MRI

- 左L5/S1に椎間板の脱出を認めた
- 前回手術で黄色靭帯の処置の有無は不明

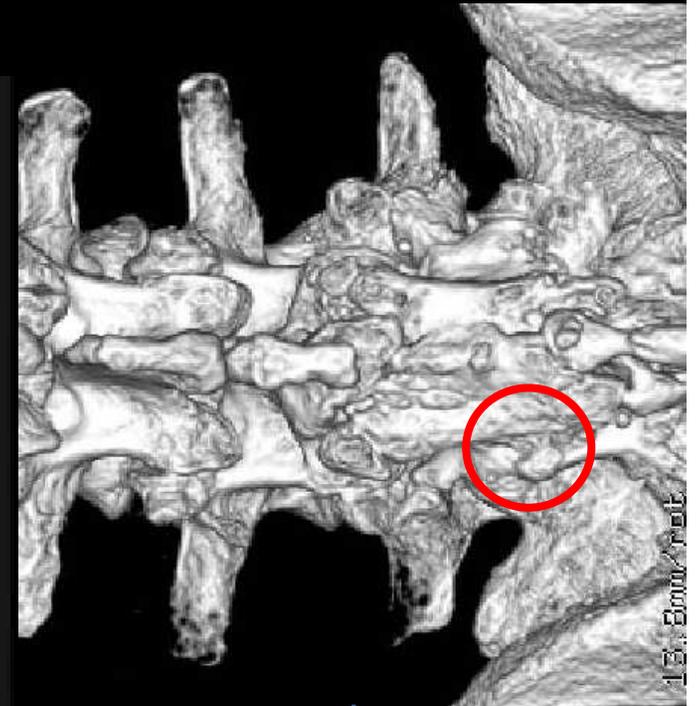


手術所見

- 内視鏡下椎間板摘出術を選択
- 手術は、16mm tubular retractorを使用して従来のMEDと同様に施行した
- 手術部位は骨化しており椎間を認めなかったため、透視で椎間板レベルを確認して正中から約1cmを中心とした直径1cm強の円形の穴を作成した
- 丁寧に掘削するとほぼ正常な黄色靭帯を認めた
- 前回硬膜外は処置されていなかったため、通常のMEDが施行できた
- 手術時間は54分、椎間板摘出量は1.5gであった
- JOAスコアは術前9点から術後1年で27点となった

術中内視鏡画像

M
DoB:
EXI



頭側

尾側

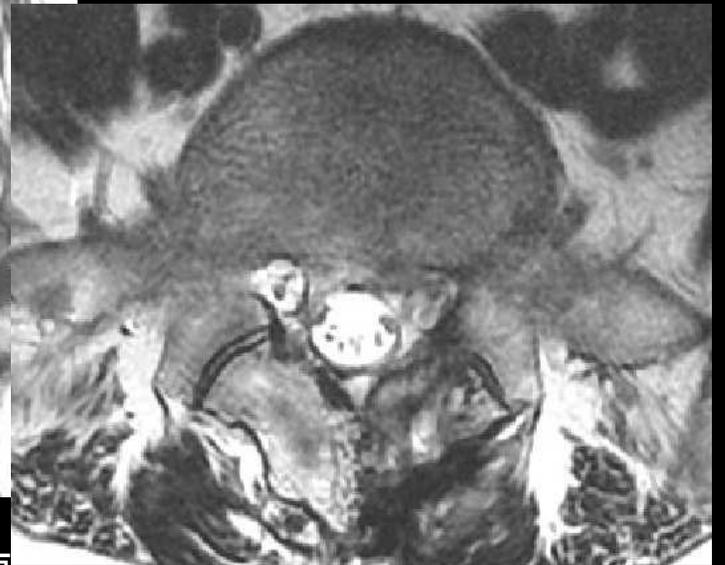
外側

ring No cut

DoB: 0c
Ext: AL

術後画像所見

13, 8mm/rot
1/0, 8sp



2013/11/21 JESMISS神戸

考察

- PLF後の腰椎椎間板ヘルニア発症 文献(一)
- 骨癒合不全の所見(一)
- 腰椎後方の癒合では長期間に前方の椎間板にストレスがかかり変性が進行か
- 本症例では硬膜外の癒着がなく容易にMEDが施行可能
- 近年再手術後の脊椎内視鏡下手術が増加
- 前回の手術で硬膜外処置(+)でも再発ヘルニア同様にMEDが可能であったと考える



まとめ

- PLF後40年で腰椎椎間板ヘルニア発症した極めて特殊な症例経験した
- PLFにより椎弓背側にmassiveな骨移植により骨癒合した椎間で発生したヘルニアに対してもMEDを安全に施行することができた